

# 子どもと家族と学校と

⑪

## 『どこからが問題？なのか、早期発見、早期対応』

CON カウンセリングオフィス中島

中島 弘美

### 問題がいろいろある学校生活

現在、この複雑な社会で暮らしている子どもたちは、何かの問題を抱え、困難なことに直面することが少なくない。

発生する場所は、学校内だけでなく、生活している地域、そしてインターネット上にあり、児童生徒が被害を受け、思わぬところで、加害者側になっている。

このような環境のなかで、クラス担任は、さまざまな事象に対して、どの程度から「これは問題だ！」と判断して対応するのだろうか？

### 何が問題？どの程度からが問題？

つぎの内容をイメージしてみてください。

『あなたは、中学1年生のクラスを受け持つ担任教師です。あるとき、35名の生徒うち、ひとりが欠席しました。保護者から風邪をひいたので欠席すると連絡がありました。そして、その翌日、始業時間前に欠席連絡がありました。さらに、翌日も連絡が入りました。欠席は連続三

日になりました』

さて、クラス担任のあなたは、この時点でどのようなことが頭の中にめぐっていますか？

欠席している生徒がクラスでどのような表情をしていたかを思い浮かべてみる。明日は登校してくるかなと期待しつつ、インフルエンザが流行し始めているのかもしれないと考える。

持病やアレルギーは？クラブ活動は？教科科目の成績など、急な変化はあったか、学校行事で本人が気にかけているようなことはなかったか、などを見直してみる。

保護者、お母さんは在家庭それとも仕事？何人きょうだいなのか、同じ学校に兄や姉は在籍しているか？妹や弟は何歳？家族構成を再確認する。

保護者から生徒への対応について要望はなかったかと情報を整理する。

### 判断のための情報集め

「うちのクラスの生徒、三日連続欠席だけれど、何か気がついたことありますか」と他の教科担任、クラブ顧問に様子をき

いてみる。

何か困っていることがあるのか？いじめがあったかな？不登校かな？もしかして、子どもの安全が疑われる状態？

情報を集めて仮説を立てつつ、今後の動きを考えていく。

こちらから保護者に電話をすれば、自宅あるいは携帯？父あて、それとも母？本人と会うことはできるのか。家族が家庭訪問に抵抗を示すことはないか？保護者は担任に相談しにくいと思っているのか、これまで、なんとなく気になることや疑問点のようなことを感じたことは？

いろいろと想像力を働かし、家族と話し合う前に、もういちど情報を整理する。

### スケーリングクエスチョン

ある生徒が連続三日にわたって休んでいる場合、担任のあなたは、今の時点でどのぐらいの問題意識を持ち始めるだろうか。その支援の必要度合いについて、数字に置き直して考えてみる。

1 ←————→ 10

必ず支援が必要だということを10、支援は必要なしを1とすると、今の時点でこの生徒に対するスケール＝問題意識の尺度は、1～10のうち、どのあたりになるだろうか。

あるひとは、5のところ印を入れた。まだ判断できる情報が集まっていないから5。

あるひとは、1のところ印を入れた。

インフルエンザかどうか、高熱が出ているのか、医師の診断はどうなのかなど、病状の確認をする。そのうえで、メンタルな問題の可能性を含めて考える。

メンタル以外でも家族の生活状況で、お母さんが病気がち、父親は単身赴任など、知っておくべき情報はないかと収集する。

再び、スケールについての話にもどる。このスケールのうち何点が妥当だと断定するものではなく、人によって受け止め方は異なる。

ここでは、スケールを頼りにするよりもその数字にした理由に注目をする。

なんだか気になるなど感じる人がひとりでもいる場合は、いろいろな可能性を考えて、支援するために動く準備が求められる。

だれかが問題だと感じた時点で、問題が存在し始めるのだ。

### 30日休むと長期欠席児童生徒

実際は、長期欠席の児童生徒として、統計上にあらわれる規定の欠席日数は、30日や50日だ。

わかりきっていることだが、29日間の欠席日数では、長期欠席として当てはまらない。もちろん、三日休んでいる場合も長期欠席ではないが、今後この欠席日数がどうなっていくのか年度末には、規定日数の範囲にはいる可能性もある。

欠席している、その背景などをしっかり把握していく必要がある。

担任教師の中には、問題意識を感じるとすぐに対応するタイプ、じっくりみて

から動くタイプ、見守ることが多いタイプ、解決するのが得意なタイプ、教員にもさまざまな先生方がいる。

何人かの教員の目を通して、つまり担任を中心に学年団で情報を共有して協力体制を整えることが必要だろう。

### **問題行動への対応が先で メンタルな問題はあとまわし**

生徒同士がケンカをしてけがをした、万引きで警察から連絡が来たなど、法に触れる問題行動の場合は、即時の対応が必要だ。

一方、連続して欠席している生徒の緊急性は高くなく、目の前で事態の変化があるわけではないため、対応があとまわしになりがちだ。

また、担任によっては、問題行動の児童生徒に対する対応は慣れていても、メンタルな問題はよくわからない、得意ではないと自覚している教員もある。

### **問題視しない親と気にしすぎの親 保護者の意識の差**

親によっても受けとめ方がまちまちだ。学校を連続して三日休んでしまうと、授業についていけなくなるのではないかと、勉強の遅れを心配する親。

病気かもしれないし、不登校かもしれない、怠けているのかもしれないし、どうも様子がおかしいけれど、親に話そうとしないので、子どもへの対応をどうしたらよいのかと困惑する親。

あまり学校がかかわってほしくないと思う保護者もいれば、できれば、相談にのってもらうことを待ち望んでいる保護者もいる。

はずすことができないのは、親が、子どもの状況をどう受け止めているのか、子どもの様子そのもの情報把握と、親の受けとめ方を区別して理解しておくことだ。

### **その日のうちに家庭訪問**

**「私は、生徒が二日連続して欠席すると、その日のうちに家庭訪問をすることにしています」**

とある教員は話す。

インフルエンザ等の医師の診断があつたとしても、学校の様子を生徒と保護者に伝えたいのでプリントを持参して、家を訪れるという。

家庭訪問をすることで、生徒本人と会えなくても、親と協力関係を作ることができるのでというのがその理由だ。

中には、子どもが学校を休んでいても、しばらくしたら元気になって登校できると、子どもが困難な状況にあることを認めない場合がある。そのときは、「完全に不登校になるまえに、相談に行きましょう」とカウンセリングや医療機関を紹介するという。

このように、教員の家庭訪問は、さまざまな問題発生の予防になると考えられ、早期対応の一例だ。

### **支援の妨げになるもの**

CONのカウンセリングにやってきた家族の中には、あと一日休んだら単位が取得できないと学校から示された家族がいた。

カウンセリングにやってくるまでに、すでにいろいろなドラマがあったにもかかわらず、来られなかったのは、本人が「明日は行くから」と、子どもの言うことを信頼していたのがその理由だという。

学校からは、以前にカウンセリングを紹介されていたが、カウンセリングに行くということは、子どもはだめな状態にあるということをはっきりさせてしまうので、避けたい気持ちがあったのも事実のようだ。

問題が起こった時に、解決を妨げるもののひとつが、ある状態を認めない、認めたくないという姿勢だ。カウンセリングにお世話になるとは情けないというような恥ずかしさもあるだろう。

確かな手立てをもたないまま、問題視をしないことで先送りする。そのままにするのは、事態を悪化することにつながると考えられる。

もちろん、自然に回復することも可能性としてあるが、対応可能な場合は、できるかぎり早い取り組みが、より早い解決につながると考える。

将来は、問題が起こってからの対応ではなく、問題が発生する前に対応できるように、予防カウンセリングを兼ねたさまざまな種類の教育プログラムも準備されることになるだろう。

### **問題を先延ばししない**

現在、不登校状態にある生徒が一日も中学に登校することなく、卒業し、高校に入学することは決して珍しくない。

また、高校に入学したあとも引き続き様々な支援があり、時間がかかっても卒業でき、別の学校への転校が可能で、高校卒業の資格を手にすることができる。

高校入学することができれば、あるいは、卒業できれば、すべて問題が解決したかのような気になる。

しかし、ここでは何がどのように問題なのかを把握して、今後子どもがどうなっていく必要があるのかを描かなければ、いつまでも事態はこう着状態だ。

大学生の不登校が増えているのは、それまでの問題事項を先延ばしにしてしまったがゆえの結果とも考えられる。

### **関係者が協力して早期対応**

問題だ、心配だ、こんな可能性があるのと、大騒ぎするのは、心理職の人に多いと言われたことがある。実際そのように感じる。

一方で、職種に限らず、年齢を重ねるうちに、危機感が薄れていく気もしている。鈍くなっていくのだ。

心配し過ぎも良くないが、何とかなると根拠もなく楽観視するのも、賛成できない。

大切なのは、問題の程度に限らず、子どもの関係者の多くの人が集まり、さまざまな立場から、気になる状態を把握して、見守りながら協力して支援することだと思っている。